

青春スクロール

母校群像記

http://t.asahi.com/dnnn

大人社会へのプロセス テレビの顔も

テレビでよく見かける慶応高校（塾高）出身者もいる。永遠の若大将、加山雄三（78、1956年卒）はイメージとは裏腹に、高校時代は髪を五厘刈りで通した。「軟派と思われるのがいやで」と笑う。

祖母に連れられて寺に通い、



「高1の時、カントリー・ウエスタンと出あった」と加山

慶応高校 6

座禅をした。ある時、祖母から「死ぬのと、どんなに苦しくても生きてると、どっちがいいの」と聞かれたことがある。「生きる方がいい」と答えると祖母はニコリとして「そうかい。そうなるよ」と言った。「享樂からは失うことが多い、苦しみからは得ることが多い」とも教わった。事業で失敗した時、祖母の言葉が身に染みた。

「高校時代は、おばあちゃんと人生について語り合い、内面の基礎づくりをした時期でした」。それが芸能界の荒波を乗り越える力になったという。多くの番組に出演する女装家でタレントのミッツ・マングローブ（40、94年卒）は、授業を時々さぼった。制服を着て、日吉駅から並木道を通じ時間に通う、ということが苦痛だった。だが、そんな苦痛な経験も今の



「日吉祭で開いたカラオケ喫茶が大人気でした」とミッツ

仕事に役立っていると思う。「最初から『無秩序な世界』で生きていたら自分中心になり、想像力や奥ゆかしさは育たなかったと思います」俳優で気象予報士の石原良純（53、80年卒）は、同級生数人と合気道部に入り、3年間熱中した。同期たちは今、ITや法曹関係など様々な仕事に就いている。「芸能界やテレビ界以外の友人は貴重です」



今もライブハウスでジャズを演奏する明石

NHK元アナウンサーの明石勇（73、60年卒）はジャズに明け暮れ、のちに作曲家になる同級生の大野雄二（74、60年卒）らとバンドを結成した。転勤が多かったNHK時代、各地のジャズ喫茶でマスターと話をすることが楽しかった。「仕事だけでなくジャズという趣味を持ったことで、人生が豊かになった」テレビ朝日アナウンサーの坪井直樹（46、88年卒）は、高校



「塾高では大人のシミュレーションをできた」と坪井

加山は11日、逗子市でセーリングレース「若大将カップ」とコンサートを開く。ミッツはNHK-BS1「スポーツ酒場～語り亭」など出演中。石原はNHKの大河ドラマ「花燃ゆ」に出演。明石は退職後「ラジオ深夜便」を担当。坪井はテレビ朝日系列の「グッド！モーニング」キャスターを務める。

のオーケストラでバイオリンを担当した。1年かけ、一つの交響曲を作り上げていく。高1の春のコンサートでは「達成感と上級生と別れる寂しさで泣いた」。そのプロセスは番組作りに通じるところがあるという。